情報理論からみた魏将軍・司馬懿と女王（邪馬台）国の関係

１．はじめに

魏志倭人伝を編纂した陳寿は文章構成能力に優れ、行間には重要な情報が隠されている。反面、研究者にとっては解釈が多様となり、結論が収束しない難点がある。

多くの場合、ミクロ（鏡や古墳など）で捉えてマクロ（EX：邪馬台国の所在地）を解釈する傾向にあり、このため多様な結論に発散しているようにみえる。重要なことはマクロ（全体像）で捉えてミクロに入り解釈することではないだろうか。

ここでは、魏志倭人伝や晋書などの記述内容を洞察して、マクロの仮説（⇒魏将軍・司馬懿の関与）を設定し、情報理論の手法により、仮説を検証し真相解明に迫ってみたいと考える。

なお、女王（邪馬台）国は北部九州に所在したとする立場注１、注２で検証を進め、紀年は旧暦を基準とし、理解を容易にする必要のある個所は新暦を付記する。

２．情報理論からみた仮説の信頼度

一般に仮説の信頼度（$\mathbb{P}$）は、$\mathbb{P}=1-\Pi(n)(1-Pn)$

$\mathbb{P}$：仮説の信頼度　　$P_1 \cdots Pn$ ：個別情報の信頼度

但し、　０＜ℙ＜１　、　０＜Pn ＜１

として算定される。

ここで個別情報（Pn）相互間に**時空の連続性**（時間と場所の繋がり）が成立し、かつ仮説ℙとの間に**相関関係**（因果）が認められれば、仮説の信頼度は限りなく「１（100%）」に近づいてゆく。

図１　情報理論からみた仮説（ℙ）の信頼度

たとえば鵜飼において、鵜匠（ℙ）と手縄で繋がれた複数の鵜（Pn）との関係でみれば、鵜（Pn）が獲物を捕獲する一連の動きは、全て相関関係と時空の連続性が成立する。

仮に夜の照明の中で、複数の鵜（Pn）だけの動きが見える場合、背後の鵜匠の手縄さばき（ℙ）によって、鵜（Pn）がコントロールされていることは誰にでも理解できるであろう。

３．邪馬台国問題を考える。

（１）仮説（ℙ）の設定

晋書・巻九十七（列伝・東夷・倭人）は、女王・卑弥呼を記述する。女王国に関与した魏将軍・司馬懿の功績を讃える内容である。

図２　仮説（ℙ）の設定

図３　司馬懿（忠達）の経歴と行動

孫・武帝（司馬炎）が宣帝を追贈したのは、女王国に進出・介入した呉軍を排除し西晋建国の道を開いたからであろう注３注５。

そこで、「**魏志倭人伝の諸記述（事態の推移）は、司馬懿の命令で実行された**」とする仮説（ℙ）を設定して、諸記述（事態）に相関関係と時空の連続性が成立することを検証してみたい。

（２）記録から割り出した移動速度（所要日数）

移動速度（所要日数）は、魏志倭人伝や東夷伝の記述を参考にして次のように解釈し設定する。

①陸行の移動速度（一日平均約 18Km）

天子に遼東の公孫氏攻略を問われた司馬懿は、「往路 100 日…復路 100 日」と応えている（238.01）。

魏軍は、梅雨の時期（5 月上旬⇒新暦 6 月上旬）遼東に到着しているから、逆算（100 日前）すると、**2 月初旬、魏都・洛陽を発った**とみられる。

洛陽～遼東間は、実距離で約 1800Km（図上距離 1500Km）あり、**地上軍が一日に移動する平均距離は約 18Km** と算定される。

なお、集団の規模によって移動距離は異なるので、大集団（魏軍⇒数千名以上）を基準とし、小集団（使節など数十名程度）の場合

は、速度が若干（2 割程度）速くなると考えられる。

図 4　魏軍の陸行、水行の移動速度（距離と日数）

図 5　地上軍と水軍の記録から割り出した移動速度・所要日数

②水行の移動速度（一日平均・約 30Km）

公孫氏攻略の際（238）、東夷伝・序は、「魏は潜（ひそか）に軍を海に浮かべて楽浪・帯方の二郡をとる」と記す。

いっぽう魏志倭人伝は、「従郡至倭…南至邪馬台国女王之所都水行十日陸行一月」と記し、**帯方郡～邪馬台国の移動所要日数を 40 日**とする。また、「景初二年（238）6 月、倭女王が難升米（なしみ）を遣わし帯方郡に詣（もう）でた…」と記している。したがって、

ⓐ魏・水軍は遅くとも 5 月までには二郡を接収していたとみられる（難升米が到着する前）。

ⓑ難升米の帯方郡到着時期（6 月）から 40 日遡ることで、**難升米が女王国を発った時期は 5 月上旬**頃とみられる（所要日数 40 日）。

したがって、公孫氏攻略に関する情報をもたらした**魏・使者の女王国到着は、難升米が女王国を発つ直前の 4 月末**頃とみられる。

当時、魏は、公孫氏に友好的な諸韓国を平定していないので、使者は**帯方郡~女王国間（約 900Km）の全行程を水行**したとみられる。

つまり、**魏・水軍が、地上軍と同一時期（2 月初旬）に洛陽を発ち**、帯方郡に到着、その後、水軍に同行していた**魏・使者**は帯方郡を経由、**4 月末頃女王国に到着**したとみられ、**洛陽～女王国を 3 カ月弱（80~90 日⇒85 日）で水行**していたと考えられる。

洛陽～帯方郡は実距離で約 1600Km（図上距離 1500Km）、さらに、帯方郡~女王国間は約 900Km あり、合計で約 2500Km となるから、**水軍が一日に移動する平均距離は約 30Km** と算定される。

（洛陽～女王国間を 85 日とみて、2500÷85≒30 となる）。

なお、魏志倭人伝の記述（「…渡一海千餘里…」）から、狗邪韓国～対馬国～壱岐国～末盧国まで、約 210Km を水行している。

国相互の距離間隔から判断すれば、一日の移動距離は 20~60Km の幅となるが、休息や風待ちを含め合計で 7 日の所要日数とみられ、一日約 30Km の水行となり、前者の算定結果と一致する。※2

以上、諸資料の解析により、相関関係と時空の連続性を確認・分析することで、陸行・水行の移動速度を定めることができる。

（3）魏志倭人伝にみる相関関係と時空の連続性

正始 7 年（246.5）から正始 10 年（249.1）にみえる魏志倭人伝、東夷伝などの諸記述、ならびに、この間 2 回興った皆既日食などを、

時間の順序に従って列挙すると、図 6 のようになる。

#1（第 1 回）皆既日食（247.2 頃）～司馬懿の自邸籠り（247.5~）～黄幢の拝仮（247.8 頃）～#2 皆既日食（248.8 頃）～司馬懿によるクーデタ発動（249.1）に至る行動（事態）を、時間の流れに沿って分析（相関性と時空の連続性）し、背後に「**司馬懿の存在（指令）**」を情報理論により検証してみたい。

図 6　司馬懿（命令）と魏志倭人伝（記述内容）との関係

①女王国と狗奴国の戦争

魏志倭人伝は「正始八年（247）、倭女王卑弥呼與狗奴国男王卑弓弥呼素不和…相攻撃状（倭の女王・卑弥呼と狗奴国の男王・卑弥弓呼はもとより不和で…お互いに攻撃しあった）」と記す。

女王国と狗奴国は戦争状態に置かれていたとみられるが、背景を分析してみたい。

宦官・曹爽（そうそう）と対立していた魏将軍・司馬懿は、東方を重視した軍事作戦を展開し、正始七年（246.5）までには諸韓国（韓半島全域）が平定され、魏の秩序下に入っている（魏志韓伝、魏志濊伝）。

その結果、諸韓国を支援していたとみられる呉軍が倭国に後退し復有国（ふくゆうこく）（出雲国などであろう）や狗奴（くな）国（熊国）の支援に廻ったた

め、女王国は劣勢に陥っていたと想定される（呉軍が後退に 2 カ月程度要したとすれば、支援開始は 246.7 以降であろう）。

戦争の期間は記述されていないが、呉軍が狗奴国の支援に廻ったと想定される 246.7 から半年程度は続いていたとみられる。

そして狗奴国との戦争のさなかとみられる時期に、北部九州では #1 皆既日蝕が起った（247.2 頃⇒専門家の計算によれば、新暦の 247.3.24　18：27）※4。

図 7　皆既日蝕と女王（邪馬台）国の争乱

魏志倭人伝や古事記（誓約・天の岩戸）の記述内容から推定すれば、

狗奴国との戦いは劣勢から敗勢に陥っていたものとみられる。

地平線に没する黒い太陽に遭遇した女王国の人々は卑弥呼の霊力が衰えたと恐れたであろう（図 7 の左⇒卑弥呼死亡説）。そこで、ただちに帯方郡に使者を派遣したとみられる。

以上のように分析し、魏軍（⇒司馬懿の命令）が韓半島諸国を攻撃した結果、倭国に戦争が波及し、偶然に起こった皆既日食で女王国の使者が帯方郡に派遣された一連の動きには**相関関係**が認められる。

②女王国は帯方郡に使者・載斯烏越(さしうお)らを派遣。

魏志倭人伝の記述（「従郡至倭…⇒南至邪馬台国女王之所都、水行十日陸行一月」）に従えば、帯方郡～女王国間の移動に 40 日が必要となるから、#1 皆既日蝕の直後（247.2 頃）に発った女王国の使者が帯方郡に到着したのは AD247.3 末頃と算定される。

なお魏志の記述する日数(40 日)は大軍の移動を想定したもので、兵站（兵器や食料など）が伴うから動きは鈍重であろう。私見では、緊急性を伴った使者の派遣など小集団の場合には、30 日程度で移動可能とみるが、ここでは、魏志倭人伝の記述にしたがい、より厳しい条件の日数 40 日で分析を進める。（図 4，5 参照）

③女王国の使者・載斯烏越(さしうお)らが戦闘状況を説明。

魏志倭人伝によれば、使者は郡に詣(もう)で「相攻撃状(あいこうげきのさま)（お互いに攻撃しあった)」と説明しており、女王国は不利な戦いに陥っていたものとなると推定される（247.3 末頃)。

これを裏付ける遺物として、弥生時代の鏃(やじり)が、阿蘇山（大野川・白川、東西の線）を南限に、九州北部一帯（特に福岡県）に分布していることが確認できる。

呉の支援を受けた九州南部の狗奴国（熊国）が九州北部に侵略し

て女王国を攻撃したことを示唆する遺物であろう注1注5。

鏃の分布は女王国の劣勢を示しており**相関関係**が認められる。

④倭国の戦争状況を司馬懿に報告（247.5）

247.3 末頃、帯方太守・王頎（おうき）は洛陽に使者を派遣、倭国の戦争状況を**司馬懿**（丞相（じょうしょう）かつ魏軍の最高司令官）に報告したであろう。

帯方郡～洛陽の行程は、黄海・黄河の水行（水軍の移動）を想定し、55 日（1600Km、1 日平均 30Km の水行）の所要日数とした場合、使者が司馬懿に報告した時期は **247.5 頃**となる。

なお使者の派遣など、緊急・小集団の場合（水行）は 40 日程度と推定するが、ここでは、時空の連続性が成立する限界（厳しい）条件となる 55 日として算定する（図 4，5 参照)。

⑤張政らの女王国派遣を決定

司馬懿は、正始 8 年 5 月（**247.5**）から正始 10 年 1 月（249.1）まで 1 年 8 カ月に亘り、「病気と称し王宮に出仕せず自邸に籠った」と記されている。奇しくもこの時期は、帯方郡の使者が洛陽に到着したと算定される時期（**247.5 頃**）と一致している。

帯方郡・使者の報告を受けた**司馬懿**は、張政らの女王国派遣を決定するとともに、宦官（かんがん）・曹爽（そうそう）らを欺く策に出たものとみられる。

帯方郡・使者の**報告を受けたと算定される時期（247.5 頃）と自邸に籠った時期（247.5）が一致**し、高い**相関関係**と**時空の連続性（⇒P１）**が認められる。

⑥使者・張政らが女王国に移動し難升米に黄幢（こうどう）を拝仮

司馬懿の命を受けた張政らは、洛陽を出発し黄河と黄海を水行し、先ず帯方郡に移動（所要日数は 55 日）したことが想定される。

そして、2 年前から難升米に仮授され帯方郡に保管されていた黄幢を持参して女王国に向かったことであろう。

帯方郡～女王国の移動に 40 日（魏志倭人伝⇒水行十日・陸行一月）を必要とするから、洛陽～女王国間は最大で 95 日(3 カ月)となる。したがって、247.5 に洛陽を発った使者・張政らが、女王国に到着した時期は **247.8 頃**と算定される。

いっぽう、魏志倭人伝は「至末盧国…**草木繁茂**行不見前人（末盧の国に至る…草木が繁茂し前を行く人が見えず)」と記し、使者・張政らが**夏季に来訪**（247.6~**8 頃**）したことを示している。

使者・張政らの到着時期と夏季来訪時期が重なる部分（**247.8 頃**）が存在しており、**時空の連続性（⇒P2）**が成立する。

すでに難升米に仮授され帯方郡に保管されていた黄幢が難升米に

拝仮されたのは、使者が女王国を来訪した後で、247.8 直後と考えるのが自然の流れであろう。

⑦卑弥呼が死去する。

魏志倭人伝は、「卑弥呼以死」と記している。

卑弥呼の死亡時期は「以死」の解釈（すでに死、又は、よって死）で見解が分かれている。すなわち、黄幢が難升米に拝仮（247.8 頃）される前の段階または直後の段階で、

ア. #1 皆既日蝕が起った時期（247.2 頃⇒AD247.3.24）

イ.黄幢拝仮の直後（247.8 直後）

の二つの選択肢が想定される。

私見では、#1 皆既日蝕が起った時期と考える。理由は、

ア．#1 皆既日蝕と古事記（天岩戸隠れ）との整合。

イ． #1 皆既日蝕と郡への使者派遣時期の整合（時空の連続性)。

が認められるからである。

ここでは、#1 皆既日蝕の時期（247.2 頃⇒AD247.3.24）に、卑弥呼は死亡したとする説に合理性があると考え分析を進める。

⑧男王が擁立される（247.8 頃）

魏志倭人伝は、「更立男王（さらに男王を擁立)」と記している。

卑弥呼の死去（247.2 頃）により女王の不在が続いていたが、ようやく男王が擁立されたのであろう。

ところで、黄幢が難升米に拝仮された時期は、使者が女王国を来訪した直後（247.8 頃）と考えるが、黄幢は女王国統治の中心（権威の象徴で軍旗）と捉えることができる。

つまり黄幢を拝仮された 247.8 頃を境に、難升米が男王に昇格したとみられ、女王国から男王国に体制が変わったことを意味し、祭政一致を信奉する人々は不安な状態に陥ったのではなかろうか。

⑨国中不服となり相誅殺

魏志倭人伝は、「国中不服相誅殺当時殺千余人（国中が不服でお互いに殺しあった。当時千人以上が殺害された)」としるすが、男王派と女王派に分かれての対立があったのであろうか。あるいは呉が支援する狗奴国の干渉もあったのであろうか。

古事記は、「高天原(たかまがはら)が皆暗く…常夜往(とこよゆ)く…萬(よろず)の妖(わざわい)悉(ことごと)に發(おこ)りき」としるしている。

「常世往く（長い夜が続く)」と表現するから、妖（争乱）は数ヶ月からそれ以上（1 年程度）は続いたものとみられる。

長引く争乱で多くの人々（千余人）が戦死し、国内は厭戦気分に

満ちていたであろう。この間、使者・張政らの調停活動が行われ、争乱の情報は司馬懿にも報告が行われたことであろう。

⑩#2 皆既日食と台与擁立（内乱終息）

やがて争乱は集結を迎えることになるが、その時期（期間）を特定する現象が皆既日食（248.8 頃⇒AD248.9.5　0603）であろう。

真東の地平線（山上）から出現した**黒い太陽が、直後に輝き**始め、女王国の人々は**太陽神（女王）の復活**を信じたに違いない※4。

魏志倭人伝は、「復立卑弥呼宗女台与年十三為王国中遂定（卑弥呼の宗女・台与を女王に擁立すると国中が定まった)」と記し、また、古事記（天の岩戸）は、「天照大神（2 代目）が岩戸から出現すると高天原が明るくなった」と記している（図 7 の右側　参照)。

争乱は約 1 年程度続いていた(247.8 頃～248.8 頃)と考えられる。

したがって、**台与（⇒2 代目・天照大神）の擁立は、皆既日食直後（248.8~9 頃）**に行われていたと考えるが、より厳しい条件（時空の連続性成立の限界）を考慮し、1 か月後の **248.9 を**想定する。

⑪張政らの帰国・報告（248.12）

魏志倭人伝は、「政等以檄告諭台与…掖邪狗等二十人、送政等還因詣臺…（政等は檄をもって台与を告諭し…掖邪狗等二十人が政等の

帰還を送り魏都・洛陽を詣でる…)」と記す。

張政らは**248.9**に女王国を発ち､帯方郡を経由して洛陽に帰還し、女王国の争乱とその終息に至る一連の経緯を、直ちに司馬懿に報告したことであろう。

移動には、女王国から帯方郡まで 30~40 日、更に帯方郡から洛陽まで 55 日、合計で最大 95 日（約 3 カ月）を必要とするから、洛陽への到着は **248.12** と算定される(小規模集団の場合、到着時期が早くなるとみられるが、ここでは大集団の移動速度、すなわちより厳しい条件で算定する)。

⑫司馬懿によるクーデタ発動

女王国の状況（平穏と呉軍の排除）を確認した司馬懿は、魏全軍を掌握し、年明け早々（**249.1．6**）に**クーデタ**を発動して政敵・曹爽を殺害し実質的な魏・略奪に成功したものと考えられる。

台与の擁立時期を皆既日蝕の１か月後(**248.9**)に設定することで、クーデタ発動に至るまでの状況推移を矛盾なく説明することができ、**相関性**と**時空の連続性（P3）**が成立することが確認できる。

以上のように、①~⑫までの一連の流れは、内容的に「**相関性**」が高く「**時空の連続性**」も検証できる。

これらは、「（洛陽に所在する）**魏将軍・司馬懿の命令で事態が推移していた**（仮説ℙ）」可能性が高いことを示している。

（３）仮説（ℙ）の信頼度

2 項で説明したように、仮説（ℙ）の信頼度は、

$$\mathbb{P}=1-\Pi(n)(1-Pn)$$

で求められる。そこで、（２）で分析した Pn（⇒P1、P2、P3）について、一例として数値を挿入し、仮説ℙ（魏将軍・司馬懿の命令）の信頼度を算定してみると、

①相関性と時空の連続性を認める場合（P1、P2、P3＝0.9 に設定）

$$\mathbb{P}=1-(1-0.9)\times(1-0.9)\times(1-0.9)=0.999\ (99.9\%)$$

②時空の連続性にやや疑問の場合（P1、P2、P3＝0.5 に設定）

$$\mathbb{P}=1-(1-0.5)\times(1-0.5)\times(1-0.5)=0.875\ (87.5\%)$$

となる。

相関性と時空の連続性にやや疑問があるとして Pn 値を 0.5 に下げても、仮説の信頼度はかなり高くなる（ℙ＝0.875）。

図 8　情報理論からみた仮説（ℙ）の信頼度

４．仮説から見える女王（邪馬台）国像

正始 7 年（246.5）から正始 10 年（249.1）までに起こった事態の

推移を総合的に考察すると、

（1）女王（邪馬台）国の位置づけ・役割がみえてくる。

魏・呉覇権争いの中で、女王（邪馬台）国が所在した北部九州地域は、地政学的に戦略上の要域（魏・支作戦正面の最終目標）に位置していることが確認できる注1注5。

つまり**魏・呉争奪（覇権争い）の要が北部九州地域**で、この要域を支配した勢力が対立勢力を排除することができるからである。

北部九州地域に所在した女王国は、（結果的に）呉の撤退を実現する役割を担ったと捉えることができる。

（2）魏志倭人伝が詳細に記述された背景（理由）がみえてくる。

女王国で起こった内乱（国中不服更相誅當時殺千餘人）と内乱鎮静化（臺与年十三為王国中遂定）の過程（247.8~248.8 頃）を通じて、司馬懿は、韓半島や日本列島（倭国）など魏の後背を脅かす呉勢力を排除することに成功したものと考える。

その結果、司馬懿は、魏・全軍の掌握（権力の集中）にも成功し、かねてから狙いにしていた**クーデタ**（249.1.6）を発動、宦官・曹爽らを殺害して実質的な魏の略奪に成功したと考える。

そしてこれら成功が、16 年後（265）、孫・司馬炎による**西晋建国**

の道を開くきっかけになったとみることができる。

魏帝（元帝）の禅譲を受け、西晋を建国した司馬炎は司馬懿に宣帝を追贈（⇒西晋建国の祖）するとともに、女王（邪馬台）国が果した役割を高く評価したものであろう。

西晋時代（290 頃）、著作郎・陳寿によって、2,008 字に及ぶ漢語で詳述（編纂）された魏志倭人伝の背景が見えてくる。

魏志倭人伝や諸資料、自然現象を仮説検証法で読み解くことにより、邪馬台国「北部九州説」が確かなものになったと考える。（了）

―関連資料―

注１　魏と呉の覇権争いからみた「女王国の争乱」（金田）
　　第 1 回東京地区大会　2014.07.19

注２　文章構造と軍事戦略…「水行十日陸行一月」の経路（金田）
　　私の邪馬台国論　2016.11.13

注３　「魏・使者の邪馬台国訪問の目的」（金田）
　　第 2 回討論型研究発表会　2017.05.21

―参考文献―

注４　安本美典「邪馬台国への道」　（株）梓書院　平成 10 年

注５　金田弘之「魏将軍・司馬懿の戦略と謀略から見た邪馬台国と卑弥呼」
　　山武出版会　2016（平成 28 年）

情報理論からみた仮説(ℙ)の信頼度

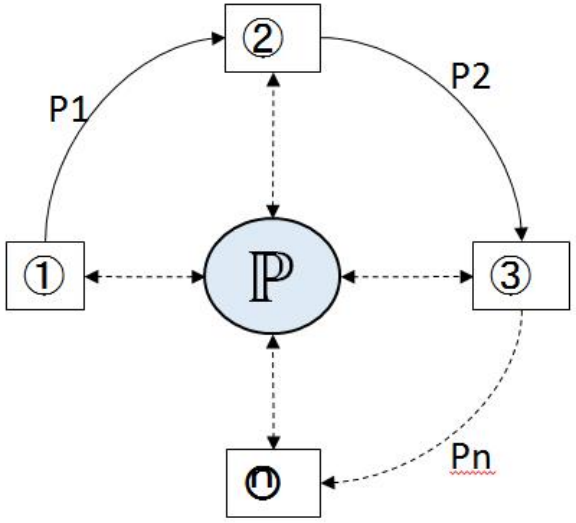
ℙ＝1－Π(n)(1－Pn)　　0＜Pn＜1

ℙ:仮説の信頼度(＝総合信頼度)
P1…Pn　:個別情報間の信頼度(時空の連続性)
①…ⓝ　:個別情報
n:情報数

仮説(ℙ)と各個別情報(①…ⓝ)の間に相関関係が認められ、かつ個別情報間の動態解析により**時空の連続性**が成立していること。

ℙ(仮説)に対する説得力、定量化が可能

事例:鵜匠(ℙ)が複数の鵜(ⓝ)を操り、漁をする手法に類似(相互に手縄で繋がる)



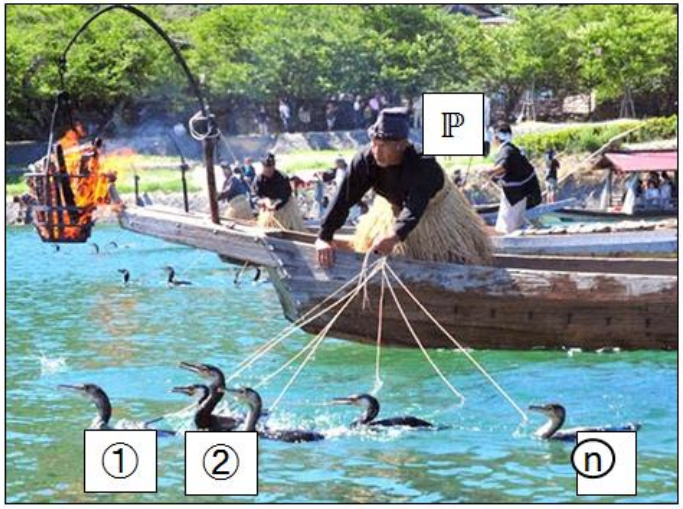


図　1

情報理論⇓鵜匠ℙと鵜ⓝの関係で説明可能

図　2

仮説(ℙ)の設定

ℙ:魏志倭人伝の諸記述(行動)は、**司馬懿の命令**に基いたもの。

(魏志倭人伝を記録した背景)
―司馬懿の狙いは**魏の略奪**―
倭国に介入⇒呉水軍の排除⇒魏全軍の掌握
⇒クーデタ発動⇒魏の実効支配

・・・晋書・巻九十七(列伝・東夷・**倭人**)・・・

「...名曰卑弥呼、宣帝之平公孫氏也、其女王遣使至帯方朝見、

其後貢聘不絶。及文帝作相又数至。

泰始初遣使重訳入貢」

・・・日本語訳(晋書・巻九十七(列伝・東夷・**倭人**))・・・

「...名を卑弥呼という。**宣帝(司馬懿)**が公孫氏を平らげると、(AD238)、**女王(卑弥呼)**は使者を派遣して帯方に到り(魏に)朝見。

その後は貢物が絶えず。文帝の時(司馬懿は)相(大臣)となり、また数致す(功績が多かった)。

泰始の初め(AD266)(**女王・台与**は)使者を派遣し訳を重ねて入貢した」

女王・卑弥呼のことを述べている。

司馬懿の功績を述べている。

女王・台与のことを述べている。

倭人に関する記述　⇒　司馬懿が倭(女王)国に直接関与した10年間(AD238~249)の功績を讃える記述。

(晋書の背景)　司馬懿はクーデターにより実質的に魏を略奪(AD249)　⇒　その後(AD265)魏帝の禅譲を受けた孫の司馬炎は司馬懿を祖(宣帝)とする西晋国を樹立。　⇒　**司馬懿の功績を晋書**に記述した

参考文献　:　金田弘之　「魏将軍・司馬懿の戦略と謀略からみた邪馬台国と卑弥呼」　山武出版会

図 3

司馬懿(忠達)の経歴と行動

…　は倭国との関わりを本文で分析

AD179	1歳	出生(温県)
AD208	30歳	曹操に仕える
AD225	47歳	撫軍大将軍に昇進
AD227	49歳	明帝から荊州方面の軍事権を委ねられる
AD228	50歳	孟達を討伐
AD234	56歳	蜀(諸葛孔明)と戦う
AD235	57歳	大尉へ昇進
AD238	60歳	**公孫淵を討伐(⇒難升米が皇帝に謁見)**
AD239	61歳	明帝が、曹爽・司馬懿に後事を託し没す
AD245	67歳	曹爽と軋轢を生じ次第に激化 (曹爽は西、司馬懿は東を重視した戦略)
AD247	69歳	**病気と称し自邸に籠る(仮病)** **(⇒張政派遣、難升米に詔書・黄幢拝仮)**
AD248	70歳	冬、荊州刺使・李勝が挨拶(偵察) **(台与擁立⇒12月倭国平穏を確認、軍掌握)**
AD249	71歳	**1月6日、ｸｰﾃﾞﾀ(⇒曹爽殺害)**
AD251	73歳	毌丘倹の反乱を鎮圧する途上で病没
AD265	没後	司馬懿に西晋朝祖・宣皇帝を追贈

幼帝の庇護
軍の総帥

戦略家
数々の戦いで負けたことがなかった

謀略家…深謀遠慮
晩年に諸問題を同時に解決した
① 倭国(女王国)の鎮静化
② 呉軍の排除
③ 魏軍の完全掌握
⇩
④ クーデタ発動 (魏の略奪)

自邸に籠った司馬懿を李勝が偵察

写真は「三国志3000人」による

図 4

魏軍の陸行、水行の移動速度（距離と日数）

注 は、陸行・水行の幅（推定）

公孫氏攻略を問われた司馬懿は、「往路100日…
復路100日」と応える（238.正月）。⇒陸行
洛陽~遼東の実距離1800Km⇒約**18Km/1日平均**

潜かに軍を海に浮かべ（238.2初旬~3末⇒水行55±5日）
楽浪・帯方の二郡をとる（238.4~5頃）　（東夷伝・序）
⇒洛陽~帯方郡1600Kmを約55日で移動⇒約**30Km/1日平均**

…南至邪馬台国女王之所都、水行十日陸行一月…
⇒水行十日で300Km　陸行一月で540Km
⇒帯方郡～邪馬台国間（距離）の合計は約840Km

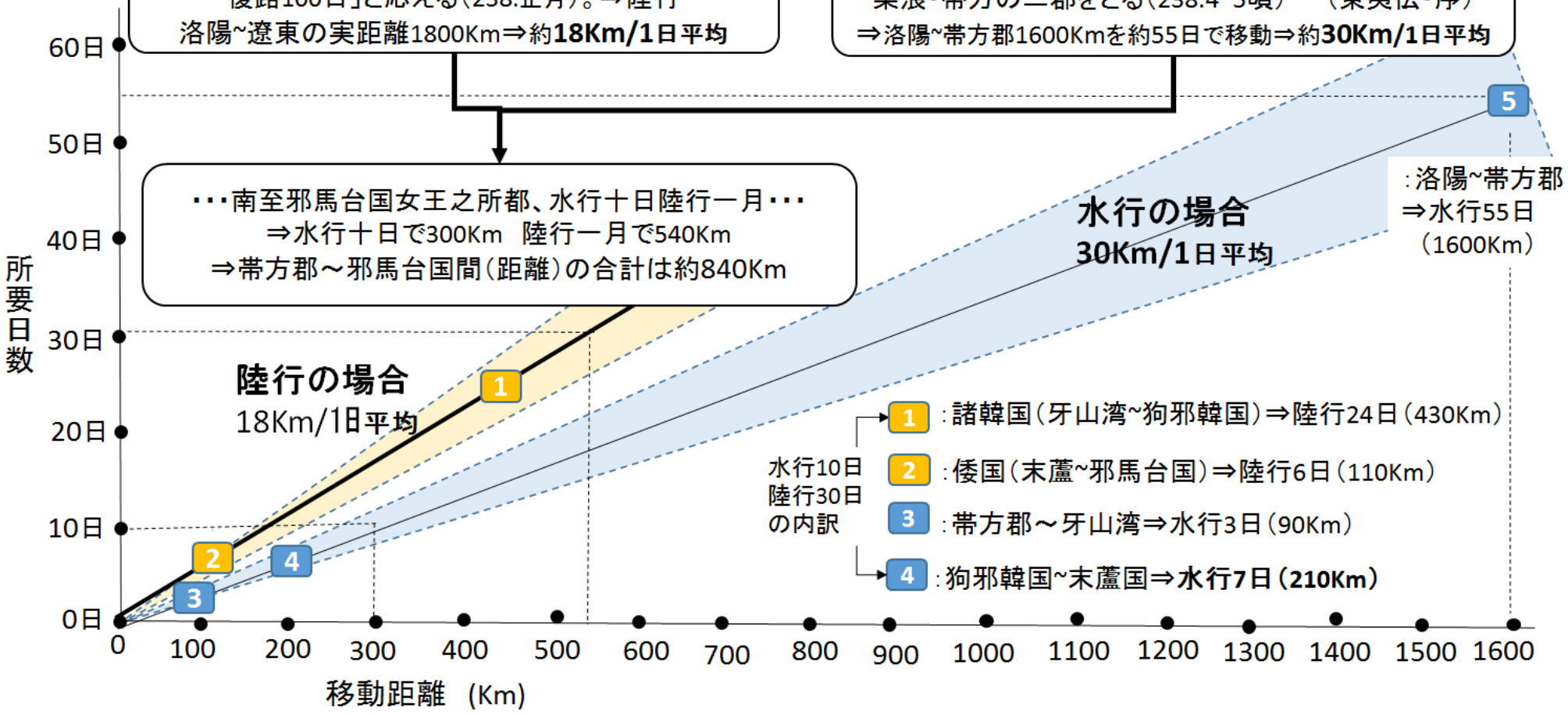


図 5

魏、地上軍と水軍の記録から割り出した移動速度・所要日数
軍（大集団）の移動所要日数
洛陽~帯方郡~邪馬台国
洛陽~ 帯方郡 ⇒ 55日（水行）
帯方~邪馬台国 ⇒ 30日（水行）
⇒ 40日（水+陸行）
緊急・小集団 ⇒ 70~80日で、移動可能と見積もられる。
洛陽～遼東間は、
実距離1,800Km
（図上約1,500km）
⇒地上軍の移動速度は
約18Km/1日平均
地上軍の移動日数
100日/約1800Km
238．5
遼東
238．8公孫氏滅亡
楽浪郡
238.3末
帯方郡
238．6
水軍の移動日数
55日/約1600Km
天子に公孫氏攻略を問われ司馬懿は、「往路100日…復路100日」と応える（238.01）
238.2初
洛陽
黄河
山西
山東
韓国
40日/約840Km
水軍の移動日数
30日/約900Km
238.4末
邪馬台国
従郡至倭…南至邪馬台国女王之所都、水行十日陸行一月…（魏志倭人伝・抜粋）
帯方郡~邪馬台国
日数40日/約840Km
景初二年（238）6月倭女王遣大夫難升米等詣郡…
⇒5月上旬、邪馬台国出発。
魏・水軍の使者は帯方郡から30日で邪馬台国に到着。
238.3末⇒238.4末
洛陽~郡~邪馬台国
⇒約2500Km・水行約85日で移動可能
⇒水軍の移動速度は
約30Km/1日平均
潜かに軍を海に浮かべて（⇒238.2初旬~3末）楽浪・帯方の二郡をとる（238.4~5頃）。（東夷伝・序）
魏・地上軍は梅雨の時期に遼東に到着（旧暦5月上旬）。
⇒ 2月初旬に洛陽を出発と逆算できる。
水軍は地上軍と同様、2月初旬に洛陽出発。
河南
武漢
東シナ海
鹿児島
長崎
宮崎
広島
山口
松山
高松
高知
大阪
鳥取

司馬懿(の命令)と魏志倭人伝(の記述内容)との関係

図 6

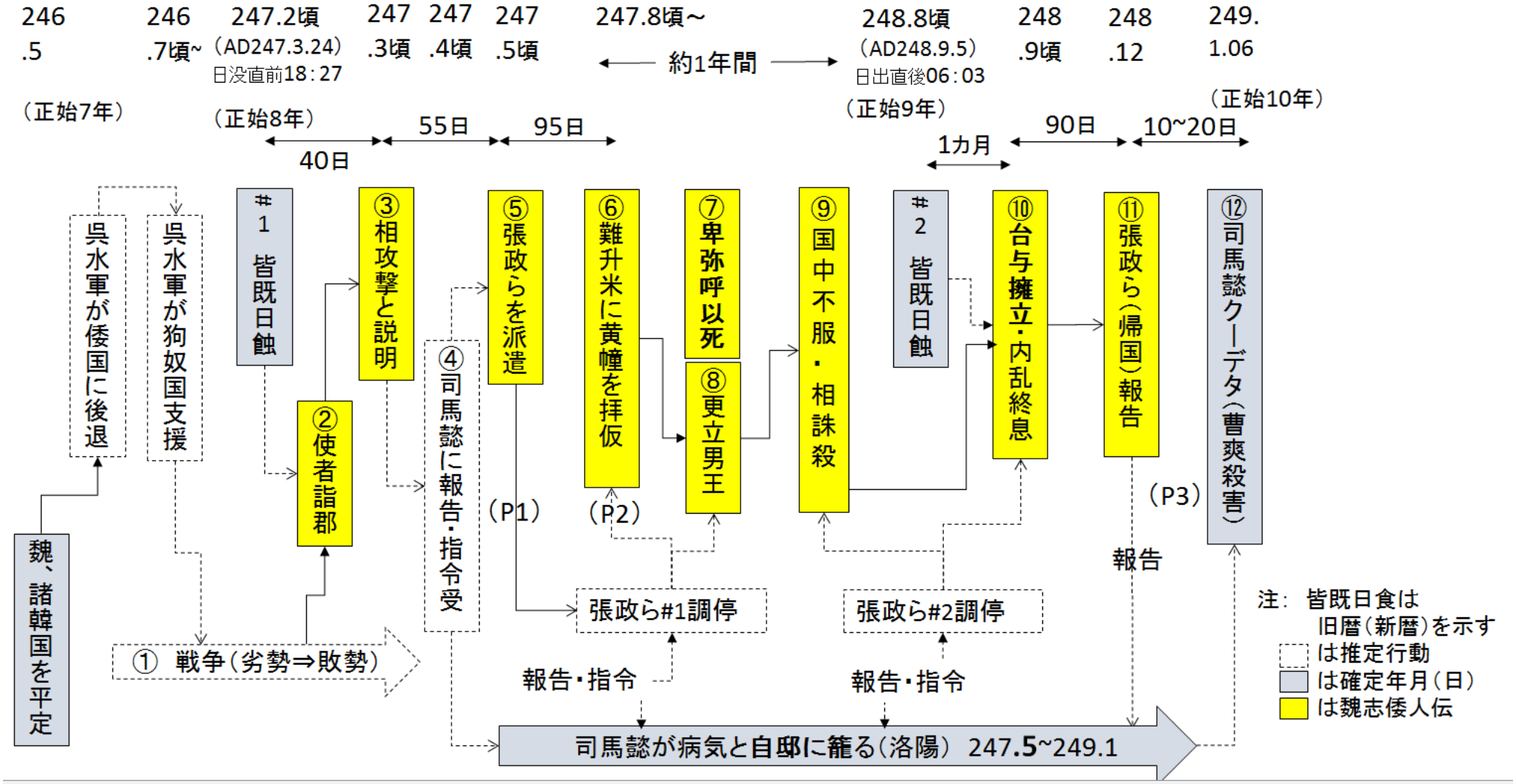


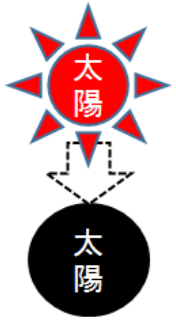
図 7

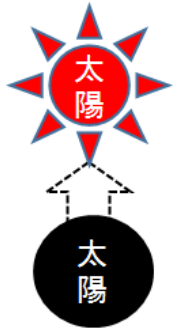
皆既日蝕と女王（邪馬台）国の争乱

狗奴国との戦いは劣勢から敗勢へ。地平線に没する黒い太陽（皆既日蝕）に遭遇した人々は、卑弥呼（女王）の霊力が衰えたと恐れた。（⇒卑弥呼死亡説）

男王を擁立し国中が不服⇒千余人殺す（相誅殺）

厭戦気分のとき、地平線から出現した黒い太陽（皆既日蝕）が直後に輝きはじめ、太陽神（女王）の復活を信じた。（⇒台与擁立説）





女王（邪馬台）国

地平線　　地平線

247.2頃（正始8年）

AD247.3.24　18：27

日没直前に皆既日食

皆既日食は九州北部。
奈良盆地は不完全な
日蝕で視認が難しい。
（元・東大教授斉藤国治氏、
加藤真司氏の計算による）

248.8頃（正始9年）

AD248.9.5　06：03

日出直後に皆既日食

図 8

情報理論からみた仮説(ℙ)の信頼度

ℙ:魏志倭人伝の諸記述(行動)は、
司馬懿の命令に基いたもの。

ℙ＝1－Π(n)(1－Pn)　　0＜Pn＜1

ℙ:仮説の信頼度(＝総合信頼度)

P1…Pn　:個別情報間の信頼度(時空の連続性)

①… ⓝ　:個別情報
n:情報数

仮説(ℙ)と各個別情報(①..ⓝ)の間に**相関関係**が認められ、かつ個別情報間の動態解析により**時空の連続性**が成立していること。

	私見	対立意見(やや疑問)
P1　#1皆既日食から張政らの派遣まで、(247.2~247.5)	0.9	0.5
P2　司馬懿病気から使者女王国到着まで(247.5~247.8)	0.9	0.5
P3　男王擁立から司馬懿クーデタまで(247.8~249.18)	0.9	0.5
ℙ＝1－Π(n)(1－Pn)	0.999 **(99.9%)**	0.875 **(87.5%)**